

## 食事会

「直会」、なんと穏やかな響きの良い言葉なのでしょ



う。「なおり」です。神事(お祭りなど)が終了して、御供え物を下げ、本来はそれらを材料にしてその場で御馳走を作り、神職や参詣者と共に食事をするのです。お神酒もいただきます。私のお寺でも5月に行われますお稲荷さんの大祭「きつね稚児」の時に僧侶とお手伝いしてくださった方々と共に仕出し弁当ですがそれをいただきます。神事の緊張感から解放され、多くの方が笑顔で帰られるのを見送り、皆で楽しく食事をします。私のお寺では、年数回ある他の佛事行事でも直会をしています。

私のお寺に来寺される大きな佛具店の営業の方が嘆いておられました。その会社が行う展示会が準備も含め1週間開催されます。その最終日の夜、打ち上げで食事会をするそうです。私も5年間お給料をいただいていたのでそういう食事会の経験はあります。最近の新入社員は参加しない旨を平気で上司に言ってくるそうです。先ずそんな人が営業にむいているのか疑問ですが、仲間と楽しく食事することによって「団結力」を高める効果があります。そういったことは疎ましいと思う人が多いのでしょうか。

佛事にも、年回法要の後に食事会を出席者全員でします。「お齋とき」とも言います。その食事会には供養した亡き人も出席されています。私

は毎回その法要の最後にとなえる「請佛随縁しょうぶつずいえん げんぼんごくした 還本国…」(請いたてまつる佛、縁に随したがって本国に還らせたまえ)を読よみません。陰膳をお供えして亡き人と食事を共にします。当日の施主は、今日縁のある人々に食事をふるまい、「楽しい食事会」にしなければならない責任があります。ワイワイ楽しい食事会の様子を見た亡き人が思わず踊りたくなってしまいうぐらいにすれば最高です。亡き人も安心してあの世に還っていかれることでしょうか。いくら高価な御馳走であっても、施す側の家庭が穏やかにつつがなく円満でなくてはそういう場をつくることのできないからです。そして施主は今回の食事会よりも、次回の年回法要の食事会がもっと楽しいものであることを目標に生活します。食事をする事で円満な家庭を営み、親族の団結を強くするという昔の人の知恵でしょうか。

夏の盃蘭盆うらぼんにご先祖様は「里帰り」をされることは皆さんもご承知で、お霊供膳をお供えします。神仏習合が否定される前の江戸時代までは、お正月にもご先祖様は里帰りされているのです。御先祖の集合霊が「歳神様としがみ」、「正月様としとくがみ」、「歳徳神」となって各家に里帰りされるのです。その準備を「事始め」と言い、12月8日(関西は13日)から始めます。その神様は門松を目印に里帰りされますので、迷うことのないよう各家オリジナルなものを制作したそうです。大晦日の夕方、神さまは到着されます。そこにお供えしたものが「御節」。元旦にお下げしてその材料で煮炊きしたものが「雑煮」で、家主が家族にお年玉(丸いお餅)出し、それを雑煮に入れて食事したそうです。 俊徳丸